

# 入学初期の学生に対する支援の一考察

—平成14年度新入生交流会の評価から—

大高 恵美<sup>1)</sup> 原田 慶子<sup>1)</sup> 重川 敬三<sup>1)</sup> 三浦 正樹<sup>2)</sup>

鈴木 圭子<sup>2)</sup> 佐藤 昌宏<sup>1)</sup> 加賀谷 隆<sup>1)</sup>

## Consideration of the Support to the Freshmen upon Entering School — From the Evaluation of the Freshmen Interchange Meeting in the 14th Year of Heisei —

Emi OHTAKA Keiko HARADA Keizou SIGEKAWA Masaki MIURA

Keiko SUZUKI Masahiro SATOU Takashi KAGAYA

**要旨：**本研究は平成14年度の新入生交流会の評価を行い、今後の新入生交流会のあり方について検討することを目的に、参加した学生へ質問紙調査を行い分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 交流会は「楽しかった」「学生間の親睦を深めることができた」等の点で、学生が肯定的に評価していた。
2. プログラムでは、「フリータイム」「踊り体験」「観劇鑑賞」の満足度が高かった。
3. 交流会で「友達ができたとする学生が多く、友人関係を形成する上で役立っている。
4. 課題として参加教職員との連携のあり方やプログラムの工夫等が示唆された。

**キーワード：**新入生交流会、新入生交流会の評価、友人関係

**Summary :** This study is based on the evaluation of the Freshmen Interchange Meeting in April. The result was later evaluated and examined for the better future interchange meeting. The following are the findings:

1. Most students evaluated the Interchange Meeting affirmatively in the point such as “It was pleasant.”, “Friendship between students could be deepened.”
2. The degree of satisfaction of “free time” “dance experience” and “the appreciation of going to the theater” was high.
3. Many students think this meeting can help them greatly in making new friends.
4. It was also suggested that some changes be made in terms of participation of the teaching staff and the future program making.

**Key words:** the evaluation of the freshmen, the Freshmen Interchange Meeting, the one related to the friend

### はじめに

文部科学省は大学における学生生活の充実方策について（報告）の中で、入学時のオリエンテーションでは、学生が適切な学修を行えるようにするために履修指導を行うことの重要性和同時に、

学生がスムーズに大学生活に踏み出せるために教員や学生同士の出会いの場として合宿を行ったり、学部・学科に限定せず教員や学生とのふれあいの場を提供するなどが必要である<sup>1)</sup>と述べている。本学では開学以来、介護福祉学科、看護学科の

1) 学生部 2) 元学生部

新入生に対して、合同で一泊二日の日程で新入生交流会（以下、交流会とする）を実施している。交流会は、学生同士の親睦を深め、協調性を高めること、また、教職員との交流をはかり、大学生活に適應できることをねらいとして行われている。

この交流会は学生部の教職員が中心となって企画・運営が行われている。毎年、終了時にふりかえりの質問紙調査を行い、その結果を参考にプログラムの内容を少しずつ変化させてきている。

平成11年度からは、宿泊場所をたざわこ芸術村とし、インストラクターの指導による踊り体験と観劇の鑑賞をプログラムに取り入れている。

今回は、交流会を学生間や教職員との親睦を深める機会とするだけでなく、交流会での活動を通して、学生一人一人が、これからの大学生活に対する自己の目標を確認することができるようにプログラムを工夫し、実施した。

交流会終了直後におこなった学生への質問調査の結果をもとに、平成14年度の新入生交流会の評価を行い、今後の方向性について検討したので報告する。

### I. 研究目的

平成14年度の新入生交流会の評価を行い、今後の交流会のあり方について検討する。

### II. 研究方法

- 1) 対象：平成14年度交流会参加学生132名（看護学科83名、介護福祉学科49名）
- 2) 時期：平成14年4月13日交流会終了直後

- 3) 調査方法：質問紙調査。質問紙は奥野ら<sup>2)</sup>を参考に作成し、「楽しかった」「グループメンバーの話を十分に聴くことができた」「自分の話したいことを話すことができた」「学生間の親睦を深めることができた」「教職員との親睦を深めることができた」「大学生活に対する自己の目標を確認することができた」の6項目から構成した。評価は5段階尺度で、「満足度がとても高い」（5点）から「満足度がとても低い」（1点）までの5段階尺度で回答を求めた。また、交流会のプログラム内容についても同様の評価を行った。参加しての感想や意見等については、自由記述を求めた。

- 4) 分析方法：データ分析時はパソコン用統計ソフト「SPSS（11.0J）」を使用した。各項目の平均値、標準偏差を求め、得点が高いほど評価は肯定的であると考えた。検定はKruskal Wallis 検定を行った。自由記述については、1内容1件とし、研究者間で検討し分類した。

- 5) 対象への倫理的配慮:交流会終了直後に、調査の主旨を説明して協力を依頼し、承諾を得た。

- 6) 新入生交流会の実際

場所：本学及びたざわこ芸術村

参加者：平成14年度入学生132名（看護学科83名、介護福祉学科49名）、教職員41名

日時：平成14年4月12日（金）～13日（土）

### <交流会プログラム>

第1日目		内 容		場 所
日時	ね ら い			
9:00	リラックスする。お互いを知り合う。	ウォーミングアップ ストレッチ・グループ作り		本 学
9:40	課題をきっかけにして、メンバーの考えや気持ちなど多様性を理解し、受容し合うことを体験的に学ぶ。	「私の名刺づくり」		芸術村 稽古場
11:00		グループの旗作り		
11:50 12:45 14:00		昼食 短大出発 芸術村到着		
14:15	「踊る」という共通体験を通して、学生・教職員と交流を図る。	踊り体験：NEWソーラン節（グループ活動）		芸術村 稽古場
15:30	芸術にふれることで、感性を高める。	踊り発表会 フリータイム		体育館
18:00 19:00		夕食 観劇鑑賞：ミュージカル「アテルイ」		劇 場
21:00		フリータイム		
第2日目				
9:00	昨日からの体験をもとに、グループメンバーとの話し合いにより自己の目標を再確認する。	交流会まとめ 「大学で自分がしたいこと」 グループで一瞬芸で発表する。		大広間
10:30		芸術村出発		

表1 新入生交流会の満足度

項 目	平均値	標準偏差
楽しかった	3.98	0.81
グループメンバーの話を十分に聞くことができた	3.93	0.91
自分の話したいことを話すことができた	3.98	1.03
学生間の親睦を深めることができた	4.17	0.84
教職員との親睦を深めることができた	3.10*	0.90
学生生活に対する自己の目標を確認することができた	3.95	0.91

\* (p<.01) (n=132)

Ⅲ. 結果

回収は132（回収率100%）であった。

1. 新入生交流会の満足度

一番高かったのは「学生間の親睦を深めることができた」4.17±0.84、次いで、「楽しかった」3.98±0.81、「自分の話したいことを話すことができた」3.98±1.03「学校生活に対する自己の目標を確認することができた」3.95±0.91、「グループメンバーの話を十分に聞くことができた」3.93±0.91でいずれも4点台に近かった。しかし、「教職員との親睦を深めることができた」は3.10±0.90と他の項目に比べ低かった。(p<.01)

6項目の平均得点は3.10から4.17の範囲であった。(表1)

2. 交流会のプログラムに対する満足度

学生の満足度は「フリータイム」4.23±0.88、「観劇鑑賞」4.17±0.86、「踊り体験」4.15±0.84の順に高かった。「交流会のまとめ」3.45±0.80、「教職員との交流」3.22±0.94は他の項目に比べ低かった。(p<.01)

6項目の平均得点は3.22から4.23の範囲であった。(表2)

表2 交流会のプログラに対するの満足度

項 目	平均値	標準偏差
教職員との交流	3.22*	0.94
踊り体験	4.15	1.04
観劇鑑賞	4.17	0.86
フリータイム	4.23	0.88
交流会まとめ	3.45	0.80

\* (p<.01) (n=132)

3. 交流会終了時の感想

記述総件数は88件あり、その内の76件が「よかった・楽しかった」という肯定的な感想であった。特に「友達ができ」「いろいろな人と話せた」な

ど他者との交流についての記述が多かった。また、「はじめは参加したくなかったが、参加してよかった」「余計なことをしないで欲しいと思ったが参加してよかった」などの記述もあった。

グループ活動の苦痛や教員との交流不足、同じ学科内で交流したい、もっと早い時期に実施してほしい等の意見があった。(表3)

表3 交流会終了時の感想（自由記述から）

	件数
肯定的な感想	
友達ができよかった・楽しかった	33
いろいろな人と話せてよかった・楽しかった	14
踊り体験が楽しかった	11
観劇がよかった	5
自分が考えた以上に楽しかった・よかった	5
自己の目標が確認できた	3
今後の生活が楽しみになった	2
リフレッシュできた	2
食事がよかった	1
小計	76
否定的な感想	
教員との交流があまりできなかった	2
ある程度グループができ話せない人もいた	1
楽しかったが、全行動をグループと共にするのは辛い	1
小計	4
交流会への要望	
同じ学科の人ともっと交流したかった	2
もっと早い時期がよい	2
小計	4
その他	小計 4
総件数	88

#### IV. 考察

##### 1. 新入生交流会の評価

今回の調査から、多くの学生が交流会を「楽しかった」「学生間の交流を深めることができた」「友達ができた」等の点で、肯定的に評価していることが明らかになった。このことから、交流会は友達を作るきっかけや学生同士が知り合うきっかけとして役立っていると考ええる。

交流会のプログラムでは、「フリータイム」「観劇鑑賞」「踊り体験」の順に満足度が高かった。これは、学生が自由に他者と関わることができる時間を例年より多く確保したことや観劇が隣県を舞台にした内容で理解しやすかったことなどが関連しているのではないかと考える。また、「踊り体験」はこれまでも、学生から好評を得ている。これは、インストラクターの指導のもと音楽に合わせて、踊りを踊るというグループ毎の創作的な活動体験が、学生に一体感を生じさせるためではないかと考える。

「教職員との交流」に対する学生の満足度が低かった理由としては、交流会の具体的な活動内容について当日発表したため学生・教職員共に緊張感があったこと、参加した教職員に対して協力内容を具体的に示していなかったため教職員側からの働きかけが不足していた可能性があるのではないかと考える。

入学初期は学生側から積極的に教職員に接してくることは少なく、教職員側から働きかける必要性がある。今後は、参加教職員の意見等を調査し、連携のあり方について検討する必要があると考ええる。

##### 2. 新入生交流会の意義

平成11年に大学における学生生活の充実に関する調査研究会が行った調査<sup>3)</sup>では、国公立大学560校中493校(88%)の学校で、大学主催のオリエンテーション合宿が行われていた。

鶴田<sup>4)</sup>は「入学期の学生は、大学の修学環境に慣れていくこと、大学に限らず新しい環境で友人関係を築いていくこと、また、その中で自分の新しい目標を設定し、人間関係を築き、自分なりの学生生活を作り出していく必要がある」と述べている。

これらのことから、新入生交流会は学生が入学初期に学友・教職員と知り合い、自己の目標を確認し、その後の学生生活の基礎を築くうえで重要

であると考ええる。

また、看護学生を対象とした入学時の合宿の意義について池田ら<sup>5)</sup>は、「合宿は入学時において『友達と知り合う』『教職員と知り合う』『大学に適應する』という点で、さらに『自分や他人を理解する』など看護学の学習への導入として意義がある」と述べている。今回の調査では、学生が「自分や他人を理解する」という点については、調査していないため、交流会が「自己理解」「他者理解」につながっているか、明確にはなっていない。しかし、交流会での活動の様子からは、作成した道具を使って、自分を表現したり、他者の発表に興味を持ち、話を真剣に聞こうとする姿や態度が見られた。今回の体験が、対人援助職を目指す、看護学科・介護福祉学科の学生たちにとって、「自分や他人を理解する」きっかけにつながり、今後の学習に結びつくことを期待したい。

一方、交流会の活動中に、単独行動が目立つ学生や交流会に苦痛を感じている学生がいた。このような学生に対しては、交流会終了後も継続的に対応を行うようにしている。このような点から、交流会は教職員にとっては、新入生の状況を把握し、学生への理解を深める場とし有効な場であると考ええる。

##### 3. 新入生交流会企画・運営等の課題

今回の調査から交流会の課題として、交流会を企画・運営する学生部と参加教職員との連携のあり方やプログラムを工夫していく必要性が示唆された。この課題は池田らの<sup>6)</sup>オリエンテーション合宿の企画運営などにおける課題と同様であった。また、学生からはもっと早い時期に実施してほしいなどの意見もあるが、学生に好評な「踊り体験」や「観劇鑑賞」をプログラムに入れる場合には、交流会開催日時や場所が制約されてしまう課題がある。

感想の中に「はじめは参加したくなかったが、参加してよかった」「余計なことをしないで欲しいと思ったが参加してよかった」など交流会参加前は交流会に対して、否定的な思いを抱いていた学生が、終了後は交流会を肯定的に評価する記述があった。今回の調査では、交流会前に交流会に対する学生の気持ちや期待を把握していなかったため、評価時に学生の期待と満足度の関係について検討することができなかつた。今後、この点についても検討していく必要があると考ええる。

## V. 結論

平成14年度の新入生交流会について、学生への質問紙調査をもとに評価を行った。その結果、以下の点が明らかになった。

1. 交流会は「楽しかった」「学生間の親睦を深めることができた」等の点で、学生が肯定的に評価していた。
2. プログラムでは「フリータイム」「踊り体験」「観劇鑑賞」の満足度が高かった。
3. 交流会で「友達ができたとする学生が多く、友人関係を形成する上で役立っている。
4. 参加教職員との連携のあり方やプログラムの工夫が示唆された。

## 引用文献

- 1) 文部科学省：「大学における学生生活の充実方策について」大学と学生，427号，p32，2000
- 2) 奥野茂代他：ナースのための自己啓発ゲーム，医学書院，pp14-15，2001
- 3) 前掲1)：p43
- 4) 鶴田和美編：学生のための心理相談，培風館 pp15-20，2001.
- 5) 池田紀子他：新入学生オリエンテーション合宿と評価，長野県立看護大学紀要3，p17，2001
- 6) 前掲5)：p18

## 参考文献

- 板野みえ子他：3年過程と2年過程における入学時宿泊オリエンテーションの成果，旭川荘研究年報，27(1)，pp4-38，1996
- 文部科学省：「大学における学生生活の充実方策について」，大学と学生，427号，pp19-57，2000
- 中島裕子他：入学時合宿による人間関係トレーニングを実施しての意識の変化，看護教育の研究，15巻，pp354-358，1998
- 吉田哲著：人間関係へのメッセージ，中央カウンセリング研究所，1997